

【資 料】

北海道に生息するナメクジ類の現状と諸問題

浅川 満彦

酪農学園大学 獣医学類医動物学ユニット

同 野生動物医学センター WAMC

身近に遭遇した事例から

本会誌で山谷^[1]が診療先の胆振地方に所在する酪農場にてみかけ、その画像が紹介されたマダラコウラナメクジ *Limax maximus* の姿に驚いた会員は少なくはないであろう。その際、道北・道東地方への分布拡大を示唆されておられたが、それはともかく、この種は10年前に初めて札幌市内で見つかり（道内初）、現在、道央・道南地方の広範な地域に完全定着をした^[2]。

これはほんの1例であり、道内には、複数種の外来ナメクジ類の定着し、北海道新聞野生生物基金の機関誌でも関連報告が掲載された^[3]。例えば、著者が居住する江別市文京台の野幌森林公園に隣接した地域でも、4年ほど前から、毎年6～8月にかけてアリオン属のある種 *Arion* sp. ^[3]を見かけるようになった（図1）。

ナメクジ類に関する衛生動物学教育の現状

当然、著者は在来種を含めナメクジ類は広東住血線虫 *Angiostrongylus cantonensis* の中間宿主となるので、ほ

んの少しだけ寄生虫（病）学の授業で講じているが、ナメクジ類それ自体の分類や生態、その防除について詳しく扱う余裕はない。もちろん（?）、獣医学教育で用いる一般的な教科書にも記載はなく、ごく一部の衛生動物学や（医学教育用の）医動物学のそれらには^[4,5]、“ナメクジ *Incilaria bilineata*”、“コウラナメクジ *Limax flavus*”あるいは“チャコウラナメクジ *Limax marginatus*”がごく簡単に紹介されていたにすぎない。ただし、これらの記述も今日では古いため、慎重に扱う必要があり、たとえば、宇高と田中^[6]によるとナメクジ（属名は *Meghimatium* に変更）は在来種であり、上掲書^[4]が解説したような“中国原産”ではないし、珍しいレベルになった程、少なくなったようだ。なお、北海道産の在来種としてはナメクジと同属で、より体サイズが大きい（マダラコウラナメクジ的なサイズ感の）ヤマナメクジ *M. fruhstorferi* の生息が知られる^[6]。

一方、コウラナメクジ（学名は有効だが、和名はキイロナメクジ）の方は、確かに“ヨーロッパ原産”ではあるが、1960年代前半以降、日本では姿を消したという。



図1. 外来性ナメクジ類アリオン属のある種 *Arion* sp. (2021年6月著者撮影)
上段左：道路脇の森林の様子、同・右：ナメクジ類が自動車に轢かれた痕
下段左右：ナメクジ類の拡大像

宇高と田中^[6]によると、チャコウラナメクジ（学名は属種とも異なり *Lehmannia valentiana*）がイベリア半島から第二次大戦後に日本に入り、外来種化すると、コウラナメクジと競合して打ち勝ったのか、それとも戦後の気候変化に不適合であったのではないかと想像している。いずれにしても、上記3種ではチャコウラナメクジを除く2種に関し、衛生動物としての側面は極めて弱まったと見なされよう。

以上のように、一般獣医師がナメクジ類に関して具備している情報は非常に限られ、かつその情報自体、誤っている危険性がある。

道内外来性ナメクジ類に関する情報の必要性

さて、北海道に生息する外来性ナメクジ類であるが、興野^[3]によると、これまで述べたマダラコウラナメクジ、アリオン属のある種、チャコウラナメクジのほか、ニヨリチャコウラナメクジ *Lehmannia nyctelia*（外観ではチャコウラナメクジとの区別不可）、ページェイロコウラナメクジ *Deroceras agreste*（外観は乳白色で優美とのこと）、ノナメクジ属（あるいはノコウラナメクジ属）のある種 *Deroceras* sp.、ノナメクジ属のある種 *Deroceras* sp. の4種が知られる。

これらナメクジ類は農作物への害動物（害虫ではない）であるばかりか^[6]、列車運行のための電力施設に侵入し、漏電事故を起こし、特急を運休させた事例も報道された^[7]。そもそも、存在自体が不快で、それゆえ「不快動物」の代表的な動物群とされる。ただし、個人的には、自然生態系を構成する在来種に対してまで、その容姿が不気味であるが故、受け入れられないからという理由でそのような扱いになってしまうのは賛同できない。ただ、実際、上記で紹介したアリオン属のある種が出現した場所の住民は、その出現を非常に不快に感じていると吐露され、殺虫剤と思しきものを噴霧していた。不快動物となると列記とした衛生動物となる。

そうすると獣医師、特に、公衆衛生分野で精励される皆さんがその対応のため、ナメクジ類に関する最新情報は必須となろう。もちろん、他の方々も、「獣医さんなら詳しいはず」と誤解され、突然現れたナメクジ類に頭を抱えるご近所に相談されてしまう危険性もある。著者もそのような事態に陥り慌てた（本拙文を著しているのもその一環）。泥縄式でも構わないが、そのような一般市民からの「急襲」に備え、今回の引用した興野^[3]や宇高と田中^[6]などを一読しておくことは有効である

う。特に、後者に関しては適切な防除法が解説されているので、ナメクジ類に悩まされている方には、是非、推奨したい。

分布拡大の要因

ところで、気になるのは最近の急速な分布の拡大の原因であるが、もっとも大きな要因は農作物や植木鉢などに伴った人為的な移動であるとされる^[6]。したがって、こういった植物を扱う場合は注意をして欲しいのだが、まあ、実際は難しいであろう。興味深い事例として、善意の行為がナメクジ類の個体数の急増を招来し、それがその地域の広東住血線虫症のリスクを高めたという報告^[8]を参考に紹介する。

発端は関東地方の簡易宿泊施設が集中する地域で、大量のゴミが日常的に放置され、問題となったことであった。これを防ぐために、市民ボランティアが草花を植えたプランターを放置され易い場所に設置した。そのため、ゴミ放置はなくなったが、そのプランターの底部にナメクジ類が大量に発生し、それを捕食するドブネズミ *Rattus norvegicus* における広東住血線虫の寄生率が非常に高まったというものであった。植物と寄生虫病という意外な関係を仲立ちするのがナメクジ類というわけである。

引用文献

- [1] 山谷省吾：小さな出会い、北獣会誌、64、261-262（2020）
- [2] 森井悠太 他：北海道に移入したマダラコウラナメクジ（有肺類：コウラナメクジ科）の分布状況、ちりぼたん、45、256-261（2016）
- [3] 興野昌樹：北海道の外来なめくじの「多様性」、モーリー、(55)、28-31（2020）
- [4] 今井壯一 他：図説獣医衛生動物学、講談社、335、東京（2009）
- [5] 吉田幸雄・有蘭直樹：医動物学改訂5版、南山堂、193、東京（2008）
- [6] 宇高寛子と田中 寛：ナメクジ-おもしろ生態とかしこい防ぎ方、120、農文協、東京（2010）
- [7] 北海道新聞朝刊：特急運休 原因はナメクジ、6月23日号（2019）
- [8] 矢部辰男：街路沿いに設置されたプランターがドブネズミの住血線虫類寄生を促した可能性、衛生動物、71、105-108（2020）